

近畿・四国ブロック統合メリットを活かした事業 食文化をテーマにした異年齢相互体験
 「ようこそ、くじら王国へ！
 ～Welcome to Kingdom of Whales!～」

近畿・四国の各地域から、くじら王国の室戸へ集まり、生活文化・伝統文化を
 たっぷり味わいました。

1. 事業実施までの経緯

旧国立の青少年教育施設の統合を契機として、交流の家の事業の一つである高校生リーダー育成事業の成果を自然の家の自然体験を中心としたプログラムに反映させることが可能になった。

近畿・四国ブロックでは、4年を1サイクルとし、「食文化をテーマにした異年齢相互体験」の共通テーマのもと、4施設が連携・協力して事業を実施している。一昨年度は、国立曽爾青少年自然の家を拠点に、奈良県の古代文化を取り入れた事業を展開した。昨年度は、山村に伝承された食文化をテーマとした事業を展開し、当施設がその拠点となった。3回目となる今年度は、国立室戸青少年自然の家を拠点に、室戸のくじら文化に焦点を当て、海辺の生活で受け継がれてきた食文化をテーマとした事業を展開する。

2. ねらい

高校生と小学生がくじらを捕って生活していた海辺の人の暮らしを教え学び合う活動を通して、高校生は自己を相対化し客観的に見つめる力を培い、自立性・自主性を育成する。小学生は互いに協力して行動できる力を培い、他地域の文化に触れる活動から自己を見つめ直す。

3. 主 催 国立青少年教育振興機構 近畿・四国ブロック 4拠点
 国立大洲青少年交流の家 国立淡路青少年交流の家
 国立室戸青少年自然の家 国立曽爾青少年自然の家

4. 後 援 愛媛県教育委員会

5. 期 日 【高校生リーダー事前研修】平成21年8月2日（日）～4日（火） 2泊3日
 【メインキャンプ】平成21年8月4日（火）～7日（金） 3泊4日

6. 場 所 国立室戸青少年自然の家

7. 参加人数 【法人ボランティアに登録している高校生】 8名（募集人数8名）
 【小学生5, 6年】 32名（募集人数24名）

8. 講 師 ○鯨漁講話 長岡 友久 氏（国立室戸青少年自然の家指導員）
 ○シュノーケリング 鈿物 正悟 氏（国立室戸青少年自然の家指導員）

9. 日 程

【高校生リーダー事前研修】

8月2日（日）	8月3日（月）	8月4日（火）
各拠点から室戸へ集合 ◆オリエンテーション ◆ボランティア活動の意義 ◆リーダー企画事前準備	◆オーシャンカヤック ◆くじら料理体験 ◆リーダー企画事前準備	◆シュノーケリング ◆リーダー企画事前準備

【メインキャンプ】

8月4日（火）	8月5日（水）	8月6日（木）	8月7日（金）
各拠点から室戸へ 集合 ●入国式 ●室戸のくじら文化	●ミニクルージング ●くじら館見学 ●くじら料理体験 ●交流会	●オーシャンカヤック ●シュノーケリング ●キャンプファイア	●出国式 室戸から各拠点へ帰県

10. 活動内容



高校生リーダー研修で様々な技術を習得する



高校生と小学生と一緒にシュノーケリングを楽しむ



高校生がくじら料理の方法を小学生に教える



出国式で、高校生が小学生に記念品を手渡す

11. 参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

小学生：満足75% やや満足22% やや不満3% 不満0%

○くじらの事や、みんなで活動して、2つの事で勉強になった。

○みんなと仲よしになれて、くじら料理も食べられた。

高校生：満足87% やや満足13% やや不満0% 不満0%

○いろんな拠点の友だちもできたし、活動を知ることができた。

○言われるまでやらない子達がいって大変だった。でも楽しかったし、良い経験になった。

12. 成 果

事業後のアンケートの自由記述から、小学生は、初対面の者同士であることに対する不安が、次第に解消されていったということが明らかになった。中には、親しい友人をつくることのできた喜びを書いているものもあった。2ヶ月後のアンケートでも、引き続き連絡を取り合っている友人がいると答えている小学生がいた。これは、府県を超えたネットワークを構築できたという意味でも大きな成果の1つである。

高校生は、2ヶ月後のアンケートの「積極的に行動できるようになった気がする」「自分の力で動きたい」という言葉から自主性・自立性が育ってきていることが伺える。これも大きな成果である。

当施設では、高校生3名・小学生28名の応募があった。このうち、小学生2名・高校生2名が昨年度の本事業の参加者であった。「もう一度参加してみたい」と思わせる事業を積み重ねられているという意味で、大変喜ばしいことである。

13. 課 題

毎年のことであるが、各施設で高校生の参加者を集めるのに大変苦労している。本事業が高校生にとって5泊6日の長期間の参加になってしまっていることがその大きな要因の1つであろう。今後、高校生が参加しやすい環境をつくる必要がある。

当施設での高校生の応募者は、3名とも高校3年生であった。来年度の本事業では、別の参加者を募らなければならない。ボランティアの事業などを通して、新たな高校生ボランティアの育成にもこれまで以上に力を注ぎたいと考えている。